

環境と経済の両立 企業経営の立場から

地球環境問題と企業経営

「地球環境問題は21世紀最大の課題で、その解決には環境と経済の両立が不可欠である」という主張は、何度も耳にされたことがあると思います。そのためには、法規制の強化が必要だとか、排出権取引や環境税が有効だとか、様々な議論がなされていますが、議論されていることは大体政策に関するところで、環境負荷の最大の原因を作り出している企業現場において、どのようにして環境と経済を両立させるべきかという問いは、案外議論されていません。

「環境と経済の両立」は、「言うは易し、行うは難し」の典型例であるのみならず、企業現場という最も重要な場所での問題から目をそらし、大所高所からの議論に終始しやすい傾向も持っています。國部研究室では、企業現場での環境と経済の両立をいかに果たすることができるのかについて、理論と実践の両面から多角的にアプローチしています。

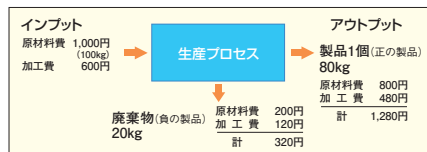
環境管理会計の可能性

企業現場で、環境と経済を両立させるには、掛け声だけでは何も前に進みません。また、ISO14001のような環境マネジメントシステムを導入すれば達成されるというものでもありません。むしろ、現在の環境マネジメントシステムは、企業の本業（すなわち経済活動）となかなか関連付けられないところに大きな課題を抱えています。

そこで、注目されているのが環境管理会計という手法です。環境管理会計は、環境に関わる情報を企業の会計情報と結び付けて、環境経営のための意思決定を支援する技術です。環境管理会計は、1990年代にアメリカで発展し、21世紀に入ってから、国連、国際会計士連盟、国際標準化機構のような国際機関も積極的に関与するようになりました。日本では、経済産業省が一貫して支援しています。

マテリアルフローコスト会計

環境管理会計の中でも、私たちが最も力を入れてるのが、マテリアルフローコスト会計（MFCA）と呼ばれる手法です。マテリアルフローコスト会計は、生産工程における廃棄物の原価を測定して、それを削減するための意思決定に役立てる方法です。下図はマテリアルフローコスト会計の基本的な考え方を示しています。この事例では、原材料が100kg投入され、そのうち80kgが製品になり、20kgが廃棄物として捨てられると想定しています。通常原価計算では、原則として、この廃棄物20kg分の原価は製品原価の中に含めてしまっ、分離して測定するようなことは



マテリアルフローコスト会計の基本パターン

しません。

これに対して、マテリアルフローコスト会計では、廃棄物も生産プロセスを通じて産出される一種の「製品」(負の製品)として識別し、原材料費だけでなく、人件費や減価償却費のような加工費も配賦して、そのコストを計算するのです。このような手法によって、これまで無価値と思われていた廃棄物を大きなコストを使って「生産」していることが分かり、廃棄物削減への活動を促進することができるのです。

マテリアルフローコスト会計は、経済産業省の熱心な支援もあって、日本ではすでに100社以上が導入し、キャノンや積水化学のように大きな成果をあげている企業もでてきました。

マテリアルフローコスト会計の国際標準化

マテリアルフローコスト会計はそのオリジナルとなるアイデアはドイツで開発されたものですが、日本で大きな成功を収め、広く普及しつつあります。そこで、日本工業調査会はマテリアルフローコスト会計の国際標準化を目指して、環境マネジメントを所管するISO(国際標準化機構)のTC207(第207技術委員会)に提案しました。この提案は2008年に承認され、現在ワーキンググループ(WG)8が設置され、2011年の国際標準発行を目指して活動が行われています。このWGでは、議長を筆者がとめており、TC207の中では唯一の日本人議長です。昨年は、コロンビアのボゴダと東京で、今年は6月にエジプトカイロで会合を開催し、委員会原案(Committee Draft)まで進捗しています。国際会議を取り仕切るのは、非常に大変な仕事ではありますが、欧米主導の国際標準化に対して、日本からの重要な貢献であると考え努力しています。



経営学研究科教授

國部 克彦

國部研究室の活動

このような課題に対して、國部研究室では、日夜研究に取り組んでいます。現在、所属する大学院生・研究生は17名で、多面的な研究を推進しています。また、2009年度から、「環境経営意思決定を支援する環境会計システムの研究」として、2009年から科学研究費基盤研究Aの大型予算の交付を受けることになり、さらに研究を促進させる予定です。研究室に活動についてはホームページ(<http://www.b.kobe-u.ac.jp/kokubu/>)でも公開していますので、ぜひご覧ください。



コロンビア・ボゴダでのISO/TC207/WG8の会合風景(2008年6月、前列左から2人が筆者)